
何考えてるの？

葵さくらこ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何考えてるの？

【コード】

N4065N

【作者名】

葵やくらじ！

【あらすじ】

交差点の信号が赤から青に変わるまでのお話！

その？

長い無言の末、彼女にこう聞かれた。

「ねえ何考えてるの？」

交差点。夏。そして信号待ち。なんとなく二人は無言で、なんとなく何も喋らなかつた。

質問というより、確認に近い雰囲気。声は平坦。それは何も喋らない自分に対しての、”静かな抗議”のように取る事も出来た。

僕は彼女の方を向かないし、彼女も僕の方を向かない。見ている方向は同じだが、気持ちの風向きは同じ方向を向いていなかった。

混ざらない風、交差しない風。

その風は薄い膜を隔てて、混ざる事のない二つの風を創成していた。眼に見えない膜、薄く揺れ動く膜、気まぐれな膜。

喧嘩したのではない。不機嫌なワケでもない。

ただ、確実に僕ら二人の間には、そんな距離感のようなものが出来上がってしまった。付き合ってから四年目の夏、二人を結びつけていた固く撚り合ったロープは、今確実にその強度を失いつつある。

新しいカラコンを派手に喧伝する広告トラックが目の前を通り過ぎる。派手な音楽と共に。

付き合い始めたあの頃、とにかく話題を探し集めていた。面白い事、くだらない事、とにかく何でも”話をしないと！”というプレッシャーのせいか、常に饒舌であり続けた自分が居たように思う。

彼女が消えてしまいかもしれない

そんな不安やプレッシャーが僕をそうさせた。

どんな事でもいい、くだらない事でもいい。彼女を笑わせよう、少しでも楽しませよう。彼女の笑顔が一度でも増えれば、それは僕の喜びであり、幸せでもあった。そして温かい安堵感が、いつも僕らを心地良く包んだ。優しく包み込んだ。それが恋だったのだと思う。今になって思うと。

そういった感覚が消滅したのはいつの頃だろうか。彼女が消えてしまふというプレッシャーが徐々に薄れ始めていた頃からだろうか。彼女という存在が僕に与える重要度、影響力、そして存在の重みが”当たり前”という地層に埋没し始めて来た頃からだろうか？

答えは分からない。

ただ、四年目の現在、僕らは今、あの頃とは違う何かをお互い感じ始めてしまっている。感触で分かる、雰囲気で分かる。そして何か

の答えを常に先送りしてるような雰囲気ですら感じた。それは緊急のものではないが、いずれは訪れる避けられない何か、逃げられない何か。

何にせよ、僕ら二人を結びつけていたロープはその強さを確実に失っていた。

擦り合わない二本のロープとして。

（続きます！）

その？

僕は目の前を通るカラコンの派手な広告トラックを見ながら思った。昔ならここで何か喋ってただろうなあと。「カラコンって禁止されたんじゃなかったっけ？」とか、せいぜいそんな程度。その程度。その程度の事だとしても、とにかく何かは話してたような気がした。

内容なんてどうでもいい。

彼女の反応が欲しかった。彼女の声が聞きたかった。今僕は何も喋らない。別に彼女の声が聞きたくないワケではない。気持ちが醒めたとも思わない。だけど特に何も話そうとしないんだ。「そんなくだらない事言っただろうすんだ？」と問いかける自分が、自分にブレーキをかける。口を開くのが面倒になっていたのかもしれない。

そうだ、自分は彼女に質問されてたんだっけ？「何考えてるの？」
って。何も答えてないや。

僕は一瞬、「別に…」と答えそうになる。ただ、出来ればそれは避けたかった。それはあまりにも空白過ぎ、虚し過ぎ、僕はその言葉から流れる冷たく乾いた感触に耐えられそうになかった。まだそこまで気持ちは冷め切ってなかった。

久しぶりに何か話さなきゃと感じた。プレッシャーに近い何か。

僕は咄嗟にこのように答えた。今になって思えば相当無理があり、見当違いな発言だが。

「アリっているじゃない？」

は？

彼女は怪訝そうな表情を見せた。

僕は続けた。

(続きます！)

その？

彼女の怪訝そうな表情は十分理解出来る。ただ、僕としては交差点に群がる人の群れを見て、なんとなくアリを想像したんだ。

僕としては、意味は通ってる。一般の人はどうだか分からないが。

僕は発言を絞り出した。

「アリって科学的には解明されてない部分が多いんだ。まず特筆すべき点は、アリ…というより昆虫全般に言える事んだけど、ヤツら脳は空っぽのハズなんだ。そもそも脳のキャパが少ない。サイズも小さい。

その大半は ” 本能のみ ” と言われており、複雑な記憶とか判断は出来るハズが無いんだ！

しかりアリは複雑な社会を構成している。複雑な行動をしている。信じられない程高度な巣を作り、子育てを行い、アリ社会全体の循環を確実に続けている。

脳がカラっぽのハズなのに…だ！

ただ、脳のキャパが少なくても複雑な行動が起こせる唯一の方法があるんだ！それはコンピュータで言うところの、『中央集約型電算処理システム』に近いシステムを利用するという方法の事だ！！！！

まず、複雑な計算や判断は高い情報処理能力を持つ ” 誰か ” が
一手に引き受ける。つまりコンピューターで言うところの ” マザ
ーコンピューター ” に該当するものだ！

そのマザーコンピューターに該当する ” 誰か ” が判断や行動を
決定し、それを『各アリ』に信号として送る。電波か何かで。

そ『各アリ』（それぞれのアリ）は、その信号を受け取り、それに
従って行動をする。各アリは信号を送ったり受けたりするだけだか
ら、彼らに複雑な脳は要らない。言われた事に従えばいいだけであ
れば、複雑な脳は不要だからだ。

ただ、問題は、” 誰がその信号を送っているのか？ ” という点。
一体誰だ？

女王アリ？

違うな。女王アリでも、アリはアリ。ヤツにそんな複雑な事はでき
ない。

実はオレなんだ。

オレは全世界のアリに信号を送る、いわば「アリ キング」なんだ！

だから僕は今、全世界のアリ達に対して、信号を送っている！信号を受け取っている！僕が無言だったのは、そのアリ達の信号を受け取り、瞬時に脳でそれを処理していたからサ！」

（続きます！）

その？

彼女は何も言わなかった。

耳を澄ませばため息が聞こえたかもしれない。

この発想の飛躍は、彼女としては、単なる ” 距離感 ” としてしか感じる事が出来なかったようだ。

当然だ。

彼女は、呆れとも、落胆とも取れるような表情を見せて、そのまま視線を道の先に戻した。どうでもいい出来事が目の前を通り過ぎ、どうでもいいから視線を元の位置に戻した…というだけのような雰囲気。

厳密には、僕も彼女の顔をまじまじと見ていたのではない為、正確には分からない。ただ、恐らくそんな感じだったのだろう。

僕は突然アリの話した事を後悔する事もなく、そのまま歩き出した。

信号、青に変わったし。

そして雑踏の中を二人、何も話す事なく歩いた。お互いの気持ちが交差する事もなく、ある場所に向かうという ” 目的 ” に辿り着く為だけの為に。

この彼女とは、その後、一年ぐらい付き合ってから別れた。

今思うと、あの頃から既に何かか緩やかに崩れ始めていたのだと思う。

彼女を失った今、

僕が、ぼーっとしてても、何考えてるの？なんて聞いてくる人はいない。

誰もいない。

僕は今、一人で交差点に立つ。そして思う。

僕が今ここで消滅しても、四日程悲しむ人はいるだろうが、困る人はいない。絶望に身を焦がし、その後の生活すら崩壊してしまうような人もいない。

誰もいない。

一匹のアリが消滅したとしても、蟻塚は続くのと同じような理由で。

一匹のアリの代わりはいくらでもいるのと同じような理由で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065n/>

何考えてるの？

2010年10月9日05時15分発行